わが人生の時の時

石原慎太郎

新潮社

わが人生の時の時

石原慎太郎

新潮社

わが人生の時の時

一九九〇年二月一五日　印刷
一九九〇年二月二〇日　発行

著　者　石原慎太郎

発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一　振替東京四―八〇八
業務部〇三(三二六六)五一一一　編集部〇三(三二六六)五四一一

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社

©Shintaro Ishihara 1990, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-301506-3　C0093

価格はカバーに表示してあります

わが人生の時の時 * 目次

漂流 7
まだらの紐 12
同じ男 19
テニスコートで 24
落雷 29
レギュラー 36
ひとだま 46
窒素酔い 55
彼らとの出会い 61
奇跡 69
キールオーバー 74
水中天井桟敷 84
冬のハーバーで 93
ナビゲーション 96
死神 111
慶良間のマンタ 114
危険な夏 120
ケーター島の鮫槌 138
落水 145
生死の川 155
光 166
鮫と老人 172

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ライター 178
鬼火 186
路上の仏 194
若い夫婦 200
戦争にいきそこなった子供たち 206
骨折 215
人生の時を味あいすぎた男 225
南島のモロコ 233
チリの娼館 247
私は信じるが 254
新島の人食い鮫 258
南の海で 266
鉄路の上で 278
父の死んだ日 284
みえない世界 291
崖の上の家 298
冷たい湖で 303
虹 309
あと書きに代えて 324

装幀＊池田良二

わが人生の時の時

漂流

彼は草分けのスクーバダイバーの一人だが、ある時期その道のプロのような仕事をしていた。プロといっても、今時のようにダイビングのインストラクターみたいな仕事もなかった時代だから、彼が金をもらってやった仕事とは、嘘か本当か知らぬが、どこかの中国人にたのまれて真夜中に横浜のノースピアの突端で、海中からなにやら長さ三十センチほどの油紙に包んだ品物を三個拾い上げる作業だったりした。潜ってみたら視界はほとんどなく、手探りで捜したら、いきあたったのは猫の死体とか壊れた自転車なんぞばかりだったそうだが、それでも三晩目に二個だけはいわれたものを見つけだしたそうな。件の中国人は残りの一つを彼が隠したのだろうと疑ってしつこく責めたそうだが、彼は居直り、それなら出るところへ出るかと逆に脅して約束の金は手にしたそうである。当時の金で一個あたり三十万円出したそうだから、包みの中身はたぶん麻薬かなにかだったのだろうと彼はいっていた。

彼の祖父は華族で、昔別荘のあった葉山あたりへ来ると古い顔見知りからは、おぼっちゃまなどといわれて照れてはいたが、主にボーカーなんぞの博打で食っていたようだ。それでも景気のいい時は渋谷で小体なナイトクラブなどをしていたこともある。時々勝手な時に私の家にやって

きては山や海の猟に誘ったりしたが、私のほうはいつも敬して遠慮していた。彼のつき合っている人間たちも、やくざではないが、どこかそんな雰囲気のある連中が多く、彼自身にもどこかまともでない様子があった。それでも矢張り育ちの良さのせいか、甘ったれで人が良く、またどこか人恋しそうなところもあった。

時折、海中で獲った大きな魚を何匹も下げて突然家にやってきたものだが、それがいつも夜中という時間で、こっちもあまりいい顔をする気にもなれず、まして死んだ大きな魚をむき出しに手渡されてもおよそありがたい気にもなれずに、数分間の立ち話で別れたものだった。

それでもこりずに、通算四度か五度同じ手土産を下げて現われたのは、私がなつかしい、というより、潜水をやる人間の少なかったあの頃、あんな魚を下げてやってくるのは彼なりのマチズモだったのだろう。

それに、彼がくれた魚は、カンパチとかヒラマサとか、いざ私自身がダイビングをやり出し銛を手にして魚を追いかけてみると、じつは大層な獲物であることが後でわかった。

その後湘南地方では有名な美人の混血の女の子と結婚したが、ある時街で可愛い男の子を抱いた彼に出会って、子供の名前を聞いたら、面倒なので時の皇太子と同じ名前をつけておいた、といわれて彼ならではと思ったものだった。

私自身がスクーバダイビングを始めてから、彼から聞いていた話を改めて思い出したことがある。

いつ頃のことか知らぬが、彼が同じ半無頼の仲間の船で伊豆の大島に潜りにいった時のことだそうな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

船の持ち主は金田という韓国人で、この男もあるホテルの乗っ取りの騒動に鉄砲をぶっぱなしたりした前歴の持ち主で、ひと癖ふた癖ある男だった。

大島の元町の北の沖合いで潜っていたそうだが、他の連中が上がってしまった後ボンベの空気をぎりぎりまで吸い、獲れるだけの魚を獲って上がってみたら船がいない。水中の潮に乗って、留まっていた船から一キロ近く流されていた。

波が出てい、高い波に乗った時はるか風上で彼を捜している船が見えた。叫んでみたが、相手は風上だから声が届かない。するうち船は何を勘違いしたのかさらに遠ざかり、暫く捜していたがやがてあきらめたのかそのまま走っていってしまった。

「俺もあきらめて泳ぎ出したが、あんたもヨットでよく通るだろうけどあのあたりは潮が強くてとても岸にはとりつけない。まず身を軽くしなけりゃと最初に突いた魚をすてた。今でも覚えてるが、でかいハタとカンパチが四本。まあ、魚はまた獲れるからな。それでも岸は遠くなるばかり。次はウエイトをすてた。人間なんてけちなもんでな、すてながらウエイトと魚と、どっちが高いだろうかなんてしきりに考えたよ。その次はボンベをすてた。次は銛。最後にレギュレーターだけ首に巻いて流されていた。

乳ヶ岬をすぎ風早もすぎて、あのあたりの潮は千葉の野島崎から太平洋をさしてるから岸へ巻かずに沖へ出てる。空は未だ明るいが波の底はもう暗くてだんだん心細くなってきた。このまま流されても東京湾へ近づくからそのうち出入りする本船にみつかるだろうと思ってたが、日がおちて空も暗くなると、こりゃやっぱり駄目かなと思った。

第一本船にいき合ったって、夜の海で人間の頭がみえるわけがない。そのまま巻きこまれてば

らばらになったまま太平洋までもってかれて魚の餌かと思ったな。そしたら、どれくらいたってかな、漁船が一ぱい通りかかったんだ。これが最後と思ったから俺としても気違いみたいに水から飛び上がって叫んださ。三、四十メートルほど目の前をいきすぎようとしていた青い舷灯が方向を変えて、青赤ふたつ並んだ形になって近づいてきた時にはこれでたすかったと思った。

引きずり上げられて聞いたら、最後に残ってた空の明りで波の上にみえた頭が、網から切れて離れたブイに見えたんで、拾おうかと思ってたら声が聞こえたんだそうだ。元町の漁船なんだが親戚に用ができて今夜だけ岡田へ舟をいれるところだったそうだ。

お前は運がいいといわれたけど、いわれなくってもそう思ってたよ。ありがたいとか嬉しいとかいうより、俺は今日はついてたんだなと、しみじみ思ったよ。

礼に何かくれてやろうかと思ったけど何もあるわけはないしな、逆に千円借りて漁協でタクシイを呼んでもらって乗った。元町の港へいってみたが奴らはいない。そこからまたはるばる波浮の港までいった。そこにいたな。奴らスターンのコックピットで酒を飲んでいやがった。俺が黙って近づき首にまいてたレギをテーブルの真ん中にほうりこんで飛び乗ったら、金田の野郎が立ち上がって、

「なんだお前、生きてたのか」

いいやがった。

俺は黙っていきなり力まかせにあいつの顎を殴りつけた。奴はテーブルの上に仰向けにぶっ倒れたよ。まわりの奴らが金田をかばって、誰かがシーナイフを抜いたりしやがったが、

「手前ら俺が幽霊とでも思っていやがるのか」

いったら、流石に金田がまわりをとめて、

「悪かったなあ、どうしようもなかったんだ」
いったよ。
俺は何かもっといいたいことがあるような気がしてたけど、でもそれっきりにしておいた」

「なぜだね」
私は聞いた。
この男は頭に血がのぼると全く向こうみずの喧嘩をするのでも仲間内に知られていた。
しかしなぜかその時、彼は肩をすくめながらいった。
「まあ、海じゃよくあることだしな」

あれから何年かたって、この頃では私も自分の船で海に潜るが、時々彼から聞いたことを思い出す。
私はたった一人で、自分を海の中にとり残していった船を追いかけたくはないし、また、誰か友達に後になって甘んじて殴り倒されたくもない。

まだらの紐

オキノエラブウナギ、と聞けば人は何か形の変わった、せいぜいがずんぐりした太めでグロテスクなうなぎを連想するだろうが、実は猛毒をもった海蛇だ。

海で見る蛇は陸でみるよりもずっと気味が悪い。昔、第一回目の南シナ海レースに出場した時、香港をスタートして翌日一日霧の中の凪で往生したが、霧が晴れて来たらまわりの水の上に大小無数の海蛇が泳ぎ回っていて度肝をぬかれたことがある。大きい奴はボートフックほどもあったから三メートルは越えていたろう。

オキノエラブウナギはそんなに大きな海蛇ではない。どんなに長い奴でも一メートルを越しはしない。しかし、形は小さいが眺めた印象は不気味な代物だ。あの小さな蛇一匹がもっている毒で牛の五頭は殺せるそうな。

もっとも、後から聞いたらこの海蛇はすっかり退化していて、その歯は口腔の中の方へ曲がってひっこんでしまっているので、人間を嚙むということはあり得ないという。しかし、歯の方は退化してはいても、毒の方は依然として猛烈なものだそうな。

この蛇を水面でみたことは全くない。いつも水の中でだ。初めて目にした時注意されるまでもなく毒のある蛇だとすぐにわかった。あんなに鮮かに黄色と黒とだんだらの爬虫類が有毒でない

訳がない。その名の通り沖永良部島界隈から南の海に住んでいるので、沖縄の海で潜っているとよく目にする。初めてみたのも八重山の海でだった。

連中にはエラがないとかで、だから水の中では呼吸が出来ず、息を継ぐためにある間隔をおいては水の上に出てきて空気を吸い、また水の底に戻っていく。

ヨットレースをやっていると漁船が引き揚げていくような時化の海を走ることもあるが、そんな時大方の魚は水の底の方でひっそりとしているのだろうし、こんな空恐ろしい海の様子を俺たち以外魚も知りはしまいなどと話すこともあったが、しかし潜り始めてみると、水の上でないと息の継げぬ海蛇だけは台風の時も凪の時もせっせと水の底から水の上へと行き来しているに違いない。

なぜなのか私は、水面で息を継いだ海蛇が水の底へ戻っていくのをみたことがない。特にオキノエラブウナギは、他のもっと大きな海蛇たちのようにダイバーに珍しげにうろうろ近づいてきてボンベにさわったりレギュレーターのホースに巻きつこうとしたりせず、いつもまっすぐに水面に向って上がっていく。しかし、それでも彼らが空気を吸った後、水底に下りていく姿をみたことがない。オキノエラブウナギもはたして帰り道には、私たちの目の届かぬところで彼らなりの道楽をしているのだろうか。

水中で初めて彼をみた時、なるほど小説家というのは嘘は書かないものだなと思った。

終戦直後まだラジオだけが家庭の娯楽だった頃、徳川夢声が例の名調子でいろいろ有名小説の朗読をやっていたが、その中にシャーロック・ホームズのシリーズがあった。聞いていて子供心

に一番恐ろしかったのが「まだらの紐」だった。
犯人は屋敷の部屋から部屋へ、たしか通風孔を伝って毒蛇をしのびこませ狙った相手を噛み殺させる。絶叫し喉をかきむしりながら死んでいく被害者が最後に口走る言葉が「まだらの紐」だった。
私はことさら蛇には興味はないが、何かのおり動物図鑑などを眺めても、コナン・ドイルが書いたように、これぞまだらの紐というような蛇をみたことがない。しかし、水の中でみるオキノエラブウナギは、視界のあまりよくない水の中でもなお彼らだけは鮮かにみえる黄色と黒のだんだらと、その手頃の大きさからしても、まさに犯人が室内での人殺しの道具に使うに格好な代物だった。

水の中にいるだけでも不安なところへ、シャーロック・ホームズの「まだらの紐」の印象もあって、あのオキノエラブウナギが水底からするすると上がって体の横をすり抜けていく時、相手も息を継ぎに急いでいるのだろうが、私としては鮫に対するよりも敬意をはらって道を空けてやらぬ訳にはいかない。いくら歯は退化しているといっても猛毒をもっているのだし、あの黄と黒まだらな姿をくねらせて近づいてこられるだけで沢山だ。多分、人間以外の魚たちも同じことだろう。だからその歯も使う機会の無いままにどんどん退化してしまったのだ。
種族の自衛や保護のためにも、強すぎてその必要が無いため殆ど進化しないまま水の中に君臨している鮫とは逆の意味で、オキノエラブウナギは、他の魚たちとは全く異なった範疇の水中の生き物という気がする。
嘘だと思ったら一度水の中で水面に向って上がっていく黄と黒のまだらの紐を眺め、触っても

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.